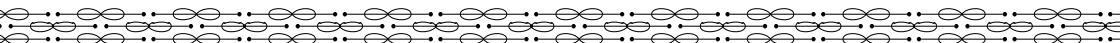


# まえがき



国際学会が開催する学術講演会(国際講演会)が日本国内においても、毎日どこかで開催されているような時代となり、研究者にとってのコミュニケーションには国境がなくなっている。このような講演会では英語が共通語として採用されており、研究者にとって英語は不可欠となり、これを避けて先進科学技術の交流は成立しない。政治も経済も国際化が進展している状況にあって、科学技術の鎖国は許されない。

近代日本が技術立国として誕生するために語学に関して大きな努力が2回なされている。最初は明治維新後で、ヨーロッパ・アメリカ(欧米)に追いつくためにドイツ語を中心とした必死の勉強によって先進技術が取り入れられた。それに、第2次大戦後にアメリカからの技術導入のために英語論文の読破と留学に力が注がれた。現在では、英語は第2外国語として位置づけられて、毎日がマスマディアを通じた英語に取り囲まれ、留学も日常化して、国際科学技術交流が活発化している。現在では英語による研究者のプレゼンテーション(presentation)がその国のポテンシャルをあらわす指標にもなっており、研究者個人のポテンシャル評価の対象ともされている。だからといって流暢な英語を話す人が研究者として高いポテンシャルをもっているということにはならない。国際講演会で上手な発表ができるとはかぎらない。また、英語でのプレゼンテーションが不得意なのを語

学力のせいにしている人も多いようだが、そのような人たちは日本語でのプレゼンテーションも得意だとは思われない。研究者のプレゼンテーションには語学力以前に必要なものがある。

研究者のプレゼンテーションでは内容が正確に伝達されること、それに聴講者が引きつけられることにある。聴講者が関心をしめし、目と耳がしっかりと対応してくれることにある。そのためには、学術講演のタイトルの選定・手順・結論などにメリハリがあり、それらを表現する言葉が必要となる。さらに質疑応答において相手の意図するところを理解して、手短にでもポイントを投げ返すことである。

研究者のプレゼンテーションの場である学術講演会では研究成果を announcement することではなく、presentation することにある。announcement は相手に一方的に報告するだけであるが、presentation は相手に“聞いていただく”ことにある。いわゆる贈り物を present することにある。講演会では苦労して得た研究成果を聴講者に present するという姿勢が基本にあることを忘れてはならない。

この本では、国際講演会においてよりよい口頭発表するための手順、および国際学術誌（おもに国際学会誌）に論文掲載するためのプレゼンテーションの基本について解説してみることにする。なおこの本は先に出版した『技術者のための英語論文プレゼンテーション』（防衛技術協会、1993）を改定して、現在の国際化に対応できるように内容を加筆改訂したものである。とくに最近の映像技術の急速な発達により、プレゼンテーションの手法も多様化しており、バーチャルリアリティのような映像によるプレゼンテーションもある。おおいに活用することも必要ではある。ただし研究発表としての本質を見失わないようなプレゼンテーションをつねに心がける

べきである。

なお、共立出版株式会社の齊藤 昇氏には出版までの調整などでお世話になり、深く感謝したい。

1999年1月

久保田浪之介

# 新訂版へのまえがき

初版を発刊してから 13 年が経過した。この間、周辺のすべてに国際化が浸透してグローバル・スタンダードという環境に囲まれるようになっていた。とくに産業と経済はインターネットによって昼夜の区別なく世界のどこでも結びつけられており、人々には休むいとまも与えられていない。学術分野でも同様で、研究成果はつねに世界のどこかで見られており、それが開発に直結して産業のなかに組み込まれている。それも一国主義は消え失せて、多国間の共同研究、共同開発は当たりまえとなっており、国際人という言葉は死語となっている。

これらを受けて遅きに失するところもあるが、小学校教育にも英語のカリキュラムが導入されて、英会話が必須とされてきた。それで国際化になるのか、という議論はいろいろとあるが、子供たちが大きくなっていくらかでも世界を恐れないためには貢献するであろうことは確かだ。中国、韓国をふくむ東南アジア諸国が、うまくない英語を駆使して欧米を圧倒している姿をみていると、わが国が日本文化を盾にしているだけで世界に対応できる時代でないことを教えてくれている。

いつもどこでも言われているように、資源と食糧の確保が必須であるわ

が国にあっては、科学技術立国をかける道以外の選択肢はない。学術研究はそれを支える礎であり、研究者に課せられた責任は政治家のそれよりはるかに大きなものと考えられる。研究者を取り囲む教育構造が近年おおきく変革して、国立大学の独立学校法人化、助教授から准教授へ、教授が大学院教授へ、などとなった。それだけ学術の世界にも危機感が浸透してきた証なのであろう。

このような研究者を取り巻く国際化の環境が否応なしに英語によるプレゼンテーションのニーズと重要性を増大させている。プレゼンテーションの手法には特効薬はなく、日常の対人関係での会話が基本となっている。ただ、英語が得意だからといって英語のプレゼンテーションが上手いわけではない。国際学会に参加して英語圏からきた研究者のうまくないプレゼンテーションに出会うとほっとすることもある。英会話の問題ではない。日本語でのプレゼンテーションのうまくない日本人は英語でもだめなのは想像できる。

本書の初版で記述したプレゼンテーションの手続きと手法は、現在のようなパソコン映像に置き換えられたプレゼンテーションとなっても何ら変わることはない。ただ、国際学会の活発化による口頭発表の論文数の増加に対応するために導入されたポスターセッションの重要性がより増してきている。新訂版では、ポスターセッションをより有効に活用するために、その位置づけ、難点、利点、発表の手法などについての記述を第8章に加えた。さらに、発表映像がOHPからパソコン利用によるPowerPointに移ってきたこと、実験で得られた現象を示すために動画の使用が一般的になってきたこと、Appendix-G「国内組織の英語名称」がこの10年間で大きく変更されてきたこと、などを反映するために加筆・修正を行った。

2012年3月

久保田浪之介